

京都府総合計画策定検討委員会テーマ別会合（温もり分野） 議事内容

●様々な事情、現実が変わる中で、文化面ではこれを機に活動をやめるという悪い方に背中を押されるような状況があります。今、ハイブリッドや zoom などもされていますが、やはり高齢の方には中々難しいという問題もあります。その一方で、中々直接的に会うことが難しくなったが故に、テクノロジーを利用した打合せですとか、親交が図れることによって、これまで参加できなかった子育て中の方や若い層の方、仕事が非常に忙しい方など、そういった方々が文化・芸術に興味を持ってアクセスしてくださるといふこともあります。

うちでもこれまで対面で行っていましたが LINE を導入することによって、若い方からは参加しやすい。これだったら自分も子育てしながら参加できる。という声もいただいています。また、海外の方からも非常に反響が大きく、マイナスと考えられていたような直接会えないという状況でも、逆にそれがこれまでの文化の担い手とは異なる関心を持った層の発掘につながっていると感じています。ただ問題としては、バーチャル上で繋がっている方々をどのようにリアルに移行していくのか、そこにまた一つ、視聴する楽しみから実際にする・関わるといった、より主体性を持った方向に繋げていく仕組みが必要だと感じています。

それから、子育てと共生ということですが、昨今の色々な問題や子どもの虐待などの状況を見ますと、孤立感というもの非常に大きな原因としてあるのではないかと感じます。そういった状況に置かれてしまった、あるいは自分から良い形で周りに頼るとか、助けを求めるといった行動が非常に不足していて、行政も色々な取組をされているかと思いますが、やはり実際に厳しい状況に置かれている方からすると、行政にアクセスすること自体も非常にハードルが高いので、やはり地域や自分たちが関わっているコミュニティの近いところで頼れる存在であるとか、居場所づくりが現実的には非常に大事だと感じています。

●女性活躍と人生 100 年時代に対応した働き方について、まずは資料を拝見して率直に女性で大変だなと感じました。なぜかという、子育てもしないといけない、仕事でも活躍しないといけない、それを皆が応援しているってすごいプレッシャーだなと感じながら読んでいました。悪い訳ではないですが、そういった雰囲気はどうすればもっと楽しい感じに変えられるのかと考えていました。資料を見て、子育てが本来持つ喜びや楽しさを感じられていないということにも驚いたのですが、例えば、女性が 1 人で頑張るってというような雰囲気ではなく、もっとその女性を応援する、あるいは、一緒に子育てをするというような雰囲気が作れないかなと考えています。今、女性が育児するに当たって、育児休業の期間を延長したり、取りやすくしたりといった方向に進んでいたり、男性が育児をするといった方向にも進んでいますが、例えば、65 歳、70 歳までお仕事を続けるときに、孫の面倒を見たいというお爺さま、お婆さまはいると思います。だとすると、お爺さま、お婆さまが取得できる育児休業制度や短時間勤務制度を導入して、自分の上司が「孫育」で育児時間を取り始めると、部下の男性も育児休業などを取りやすくなるのではないとか、コミュニティを作るといふ意味でも、子育てを軸にお爺さま、お婆さまが関わっていけるような制度を作って、お爺

さまとお婆さまが孫の保育園の送り迎えなどをすることによって、お爺さまとお婆さまも地域のコミュニティに入っていける。そんな色々な問題を一気に解決できるアイデアが出せたらいいのではないかと思います。そうすると、女性1人で子育ても仕事も頑張らないといけないことにはならないかなと思いますし、65歳以上で働かれる方も、自分の孫の面倒を見るために仕事を辞めるのではなく、人生100年時代に対応した働き方にも寄与できるような仕組みになるのではないかなと思います。

もう一つは、障害を持たれた方の雇用に関して、私が今職場でやっていることなのですが、障害を持たれた御本人に対しての支援は行政や国がやられていると思います。一方で、それを受け入れる企業側の支援は中々難しいものがあると思っています。ですが、発達障害の方や、精神に障害を持たれている方に配慮をすれば、持っている力を存分に発揮できるポイントは、ある程度共通しているように感じています。実際、うちのメンバーも配慮をすれば、本当に見違えるほど活躍する人が実は多くいらっしゃいます。一方で、その配慮が上手くマッチせず、中々力が発揮できない方もいて、そのノウハウを企業間で共有できるような仕組みを民間で作れたらいいかなと思っているのですが、府や市と協働してできることがあると面白いかなと考えているところです。京都は、日本初の精神病院である岩倉病院ができた土地柄もあるので、京都府や京都市から障害を持たれた方の支援というか、一緒に活躍していこうといった雰囲気が出ていくと、行政も企業も協力して活躍を後押しすることができて、とても地域にマッチした施策かなと思います。

- 子育て環境日本一ということで、まずはここにこだわって京都は進むべきだと思います。人口減少による課題が非常に多いということは間違いありませんし、どこも対策はしたいのだけど、中々手が付けられていないところだと思います。南北に長い京都府全体で、課題が同じものと、地域性があるものがあると思うので、私の案は26市町村の中での特殊性を分けて取り組んだらどうだろうかということです。全体的な課題としては、子育てにお金もかかりますし、助成金などは共通して必要だと思いますが、あるところでは介護と育児、例えば保育所などがミックスした形でやった方がいいところもあるでしょうし、京都市内の行政区と舞鶴や京丹後などの北部地域では課題も違うと思いますので、例えば、府が権限を委譲して市区町村に競争してもらうのが良いと考えます。例えば子育て環境日本一に向けた我が市の取組はこれだ、という形で市区町村からモデルを挙げてもらい、それに対する助成金を京都府が出して、企業や団体などに交付するというような、地域の特性を生かしたものがあればどうかと思います。それと、ひとり親の家庭というのが増加してきているという気がしていて、そこを少し懸念しています。ひとり親家庭だけをベースにということではないのですが、家族単位よりもひとり親を想定した子育ての支援体制を考えていかなければ、これからは難しくなってくると思います。当たり前のように、家族におじいちゃん、おばあちゃんがいた世帯から、夫婦だけで、または片親で育てるという世帯も増えてきていますので、そういったところを地域

の特性も踏まえながら取り組んでいただきたいと思います。

もう一つは、さっきもお話がありましたが、60歳、65歳、または延長して70歳定年のところも今はありますが、その会社にずっと勤めていると、そこで打ち切りになってしまうので、60歳まで精一杯働く中で、あるいはもう少し早くても良いですが、副業といった考え方もあるかと思います。生涯その会社で、という人なら同じ会社に勤めていても面白いと思いますが、また違う分野で、例えばその会社で働き続ける場合も週2日・3日、あるいは午前中など、空いた時間でまた違うことができないかと、ある一定の範囲に拘束されることはあっても、いくつか選択をして、その選択の中で生きられるような働き方。例えば、農業であっても、京都市内でやる農業と、舞鶴など北部でやる農業は違うと思います。そのようなところで住み分けをしながら、もちろん重なるところもありますが、地域特性の中で子育て、あるいは人生100年時代に対してどのような取組がこの市、この町にマッチしているのかという議論の中で、その地域に見合った取組に助成をしていけばいいのではないかと思います。

私は一番の課題は肌で触れあう機会がないことだと思います。子供が生まれて、抱っこをして、という昔はあった光景を今ではあまり見なくなりました。そのような中では、結婚して子供を産んで、自らがその子育てに参加しようという考えが中々生まれません。私がよく言っていたのは、まちの写真屋さんがなくなってきました。例えば、空きスペースを活用してまちの写真屋さんに子供や家族の豊かな表情が映ったビデオや写真を飾っていただくと、赤ちゃんっていいねとか、家族っていいねという、ほのぼのしたものが何か肌で感じるような、私たちの若い頃は当たり前にあった光景が随所で見られるようになればもっといいなと思います。

企業の方をお願いをして、協力してもらいながら行政についていっていただくことができれば、子どもに対してしっかり社会全体で取り組んでいこうというイメージになるのではないかと思います。先程ひとり親の話をしました。抱え込んでしまってどこに相談したらいいかわからないなど、困ることはたくさんありますので、相談する窓口は絶対に必要だと思います。それ以上に、まず社会全体で困ったときはここに相談し、誰もが助けることができるように、京都府で取り組まれていることも非常に良い活動だと思います。そのようなことをその地域特性を踏まえて26市町村でできるということを明記できれば良いと思います。働くということについては、年齢で働ける人を区切るのではなくて、働きたい人にはしっかりと働いていただいて、最低賃金でも賃金をもらって活躍していただければと思いますし、私たちもそのような仕組みができないか提案させていただきます。

- 先ほどお話があった孫育について、ちょうど8月に2番目の孫が生まれるので、実際に助けてほしい日程を子供から言われていまして、孫育休暇が本当にあればいいなと思いましたので、実際会社にも言ってみたいと思いました。

論点の中で、京都でどのような子育てができることが目標かを考えていました。もう既にで

き上がっているのかもしれませんが、私の中では老若男女全て、みんなで助け合い、たたえ合い、認め合うような子育てができると素晴らしいと思います。子育ては、どのような大人に成長するのかを見据える必要があるということ、また、子供の成長だけでなく、親も成長することが非常に大事で、親が充実感を味わえて、親が助け合える経験を持つことができ、親が学べるということ、つまり親軸というものが非常に重要だと思っています。

このたたき台の1番については、子育てが本来持つ喜びや楽しさを感じられない最大の原因を私が職場等々で見てきた中で言うと、共働き世帯が増えて、みんな余裕がない中で、キャリアも子育ても全て中途半端という、中途半端感を抱えている層が非常に多いのかなと思いますので、今や主流である共働き世帯の状況把握が一番重要だと思っています。また、男性の育児参加は大きなポイントとっていて、10月から育児休業給付制度が変わることで、男性も女性も小刻みに育休を取れるようになることなど、応用が利くようになり、10月を起点として社内でも変化を起こせるタイミングではないかと感じています。そして職場以外のネットワークがないということが共働き世帯の女性は非常に多いと思っています。

2番の出産・教育に係る経済的負担の軽減については、人気エリアや経産省が5月に出した未来人材ビジョンについて見たところ、人気のエリアでは12の項目（保育、妊婦、医療、住まい、環境、自然、文化、利便性、教育、資源物、防犯、障害児）に焦点を当てて頑張っているなと思います。もちろん経済的負担をいかに軽減するかということも非常に大事だとは思いますが、継続的な満足度や安心度に繋がるのは、やはり防犯、また、このデジタル社会で育った人たちがユニークな知恵を絞った制度も必要なのかなと思います。ちなみに私、前職で宿泊施設を20代の男女で運営していたのですが、そこでは20代の男女の意見も中心に据えて就業規則を作っていました。ピンチヒッターヒーロー制度という非常にユニークな福利厚生を考えまして、具体的には、アルバイトさんや大学生が急遽休むことも多かったのですが、誰かがカバーしなければいけない。そのときにピンチヒッターをお願いしますと、その助けてくれた人に1,000円を支給するというような制度を作りました。お願いする方も嫌な気持ちにならず、助ける方も優秀なヒーローとして運営できるという形でうまく回ったということがありました。例えば福利厚生のようなものも、デジタルと、10代、20代の若手にもユニークなものを考えていただけるような仕組みが必要かなと思います。

- あまり具体的なアイデアを持っている訳ではないですが、少子化対策が最重要課題であり、整理して考えないといけないと思っています。一つは合計特殊出生率ですが、これが2.06を超えないと人口維持できないので、これを実現するための政策とはどういうものかということですが、このことは、結果が出てくるのが20年、30年以上先かもしれないので、2040年のあるべき姿の先をさらに考える視点がすごく重要ではないかと思っています。これを実現するためにいろいろ言われているのですが、例えば、これまでもお話があった経済的事情や介護あるいは子育てなどが負担になり、余裕がないとか中途半端感があって、そのような環境が若い人たちの価値観を変えていくとするならば、それを元に戻すとか違う

形にしていくことはすごく大変なことで、2040年より先のあるべき姿というのは、例えば京都府の人口が、現状の260万ではなくて、ひょっとしたら150万に減少しているかもしれないというようなことも見据えて考えていかないといけないのだと思います。

もう一つは、合計特殊出生率2.06を達成するまでの間はどんどん人口減少が続いていきますが、特に若い人たちが減少していくことに対して、どのように社会機能を維持するか推測し、対策を立てていくことがすごく重要だと思います。その中で、一番の問題はおそらく人材不足であり、例えば今年生まれた子ども達が少ない訳ですから、20年後には人手不足は間違いなく生じるので、その人手不足をどのように乗り越えるかということですが、乗り越えなければいけない課題は、実は高齢者の問題だと思います。高齢者がすごく増えているので、高齢者をどのようにお世話していくか、守っていくかということですが、安心分野のテーマ別会合のときにすごく面白いアイデアを聞かせていただきました。具体的には、高齢者に対して例えば介護保険であるとか、色々なことに対してサービスを提供する視点で支援が行われていますが、高齢者が社会の役に立つという視点で考えると、一つは、若い子どもたちの教育に関わるということ。それから、65歳を過ぎた後、アルバイトをしながらだんだん違う仕事、第2の人生を歩んで、そこで所得を得て、きちんと税金を払っていく、あるいは共助に参画するというようなことで、社会参加をしっかりと支えていただくことが重要だと思います。それにより働く若い世代の負担が減っていくのであれば、もっと活躍して、ゆめ実現に向けて個人が頑張っていけるような環境になっていくと思います。

もう一つのテーマの子育てについて、親として一番心配なのは、子育てそのものと同時に、子供たちの教育だと思います。その教育に対してすごくお金がかかるので、一人目は育てられても二人目、三人目が難しいということなので、その支援をしっかりとしていくことは避けて通れないと思います。そのようなところを軸として早速検討いただくと良いかなと感じています。

例が悪いかもしれませんが、視覚障害者の皆さんが日本の社会で自立できているのは、点字ブロックがあり、あるいは横断歩道で音が鳴り、色々なサポートがあって、社会の仕組みとして彼らが自立できるようなシステムができ上がっています。高齢者に関しては、高齢者がどんどん増えて、認知症の人が増えていくことが一番の問題かと思っています。今は認知症の人は例えばグループホームなどに閉じ込めてお世話するしかないような状況ですが、彼らがどうすれば1人で安全に生活していけるかを考えると、一つはそのような社会的なシステムを作り上げていくこと、それから活躍できる高齢者には、ぜひ社会参加して活躍していただくとともに、子供にはしっかりと教育していただく、そのような状況ができると、先程お話があった中途半端感や、余裕がない状況から、チャレンジにつながり、それが例えばイノベーション、あるいはベンチャー企業のようなことに繋がっていくのではないかと思います。

●20年先の課題を考えた時、どの問題、課題を考えても根本的には人口減少や少子化が影響していることが改めてわかり、問題意識が薄かったなと感じているところです。我々が普段生活する中で、そういったことを考える機会がなく、他人事のように思ってしまい、今まで国や行政が動いてくれるだろうとあまり真剣に考えたことがありませんでした。これが一番の問題だと思っています。府民に問題意識を持ってもらうためには、もっと色々な情報を開示していかなければいけないし、例えば企業であれば問題解決の際に、数値目標を明確に立てるかと思います。その数値に対して20年先までには何をしなければいけない、10年先までには何をしなければいけない、目の前の1年は何をしなければいけない、といった進め方をしていきます。行政が全くそのとおりにできるとは私も思いませんが、数値目標などを開示して、ロードマップやマイルストーンを明確にして、そして各世代の人たちにも広く伝えることができれば、皆さんの意識も高まるのではないかと思います。

また、長期スパンで考えると、やはり教育が大事で、知識を覚えるような詰め込み式の勉強もある意味大事なのですが、それと併せて、課題解決であるとか問題を解決していくような授業が小学校からあって、こういった人口減少などについてリアルに自分たちで考えるような仕組みができれば、皆さんにも問題意識が生まれてくるのではないかと思います。また、これを続けることで、小学校、中学校、高校、大学における教育の中で、こういった現実を見てそれが問題と思う人もそうでない人ももちろんいらっしゃると思いますが、現実に対する意識を皆さんで共有することが非常に大事ではないかと思います。

また、現状の教育現場は本当に大変だと思います。先程、高齢者の社会参加に関するお話がありましたが、私の知っている社長さんが会長さんに退かれてとか、まだまだ働けるのに後継者に経営を譲る方も多くいらっしゃるって、もったいないなと普段感じています。そういった方々に社会参加し貢献していただいて、色々な問題を解決していく教育に携わっていただくことができれば、高齢者に働いて収入を得てもらうことや、認知症対策や、意欲をずっと持ち続けて長生きしていただくことなどにも繋がっていくのではないかなと思いました。

●子育て環境日本一について、このたたき台に書かれている色々な対策は非常に的確だと思いますが、私なりの角度から3点申し上げたいと思います。

一つは育児に関する不安を緩和するための対策を重点的に取っていくべきではないかということです。子孫を増やすのは本能であるはずが、子供が減っていくのはなぜかという、今の社会で子供を育てることに対する不安が非常に大きいと思います。三つ例を挙げますと、一つは今の日本人は税制度の中で、年金や医療、介護、あるいは自分自身の老後の生活など、様々な不安を抱えており、生まれた子供が本当に幸せに生きていけるのだろうかと思ってしまって、段々と子供を作っていないようになっていくのではないかと思います。そういう意味では、新しい総合計画で希望のある将来像を書いて、それを府民に提示していくことが非常に大事なことはないかと思います。その点では、この七つの政策群（仮称）の政策群というのは、政策を作る側からの言葉であり、これを読んだ府民がそのビジョンに共

感して希望を持ち、そして子供を作っていこうと思わせることが大事だと思います。その観点では、七つの政策群というより、むしろ七つのビジョン、あるいは七つのゆめビジョンみたいな表現にした方が、全体的な不安が希望に変わり、若者が集まり、そして出生数も増えるという流れができる感じがします。

二つ目の例は男性の育休です。これは制度的にはずいぶん進んだのですが、まだ 13%ぐらいしか育休を取っていません。何で育休を取らないのか色々な人に聞きますと、制度は色々ありますが所得が課題であり、80%とか 50%ぐらいしか補填されない、つまり所得が減ってしまいます。保険だから当然なのですが、この問題を府として少し重点的に補填するような施策を考えていけば、京都では育休を取得して、男性の家事参加も進んで、出生数が増えていくようなエリアになっていくような感じがします。

三つ目の例は、育児と仕事の両立が難しく、子供を育てることに不安を抱いている女性が多いことです。待機児童がずいぶん減ったと言われていますが、色々聞いてみると本当に行きたい保育園にはなかなか行かせられないといった細かいところでのミスマッチがあるようです。その意味では、保育産業、あるいは介護もそうですが、少子化時代、女性活躍時代のインフラ産業として、保育士の給与や、経営の自由度を上げるといった強化をし、評価をしていくことが重要だと思います。この不安に対する対策が大事で、この不安というのは施策を打てば解決して、そうするとまた次の不安が出てくるという具合に、常に変化していきまます。子育てに対するどのような不安をみんなが持っているのか常にモニタリングしながら、それに対して的確な対応をとっていくような仕組み、例えば子育て不安解消委員会を作り、色々な人がそこに参画して、不安や対策を常に考え、ランニングしながらその施策を強化していくことが必要ではないかと思っています。

大きな二つ目は経営者の意識を変えることです。例えば今でも出産後に会社を辞める女性が 40%程います。だんだん減ってきていますが、子供を産むとキャリアが切れてしまうのではないかという不安に繋がり、なかなか子供を作らないということがあると思います。この問題を解決するには、結局経営者の意識改革しかないという訳です。その意味では、このたたき台に書かれてある大規模啓発や、行動宣言企業 100%プロジェクトなどは、世論を醸成していく上で非常に良いことだし、新感覚ジョブ博で優良企業の横展開をするのも非常に良いと思います。できたら優良企業を表彰してインセンティブを与えていくようなことや、例えば東京都におけるエシカルマークや京都版のくるみんマークのような子育て優良企業のマークを作って、インセンティブを与えていくということも必要ではないかと思っています。そして、出産や子育て支援による対策を行うことは、その会社、あるいは地域にとって最大の成長戦略だということをもっと前に出したらいいと思います。少子化を止めるためにはこのようにしないといけないといった、ある種の社会的大義のようなものが前面に出てきて、それはその通りなのですが、なかなか 1 人 1 人の経営者や個人がどうすれば行動を変えられるかということ、大義を言うだけではなかなか動いていかない訳で、これをすることで会社の成長に繋がりますよ。リクルートにも繋がっていいことでしょう。一人一人に

とってもいいじゃないですか。というような謳い方をもっと前面に出していくと、この子育て施策が、単に少子化を防ぐ、あるいは何かを守るだけではなく、京都の成長や京都の地域競争力をつけていくことにつながるのだということをもっと全面に上げていってはどうかと思います。

大きな三つ目は、子育て環境日本一の推進条例ということで、施策を条例化していくことは非常に大事なことだと思いますので大賛成ですが、少子化を食い止めるための施策というよりは、京都というエリアが生き生きと成長し、人口も増えていくための成長戦略として前面に掲げてみたらどうかと思います。また、ペナルティよりもインセンティブが大事だということ。常に個人や会社、子育てに対しての不安をモニタリングしながら施策を進化させていく仕組みを作ることが大事ではないかと思っています。

- 農業は色々な分野に貢献できる産業ではないかなと思っています。その中で、子育てに関連して、食育という言葉がかなり前からあって、教育の部分なのかもしれませんが、農業と教育をセットにして子育てをしたら良い効果が出ると思いますし、どんどん使っていってほしいと思っています。昔は各家庭どこかに農との関わりが必ずあった訳ですが、今は農との関わりが2代、3代前からほぼない家庭が多く、町に住み、農村のこともほぼわからない状況の中で皆さん育てているかと思っています。つまり今、小さなお子さんを育てられている親御さんも農村や農業についてはあまり知らないと思います。農村には横の繋がりや地域が子供を育てるような昔からの伝統や文化がまだ残っていますが、やはり高齢化していて、なかなか若い子どもたちがいないという状況です。たまに修学旅行や民間学校などで若い子ども達が来る地域もありますが、そういったところの方々のお話を聞くと、もちろん来ていただいた子どもさんも親御さんも大喜びですし、逆に受け入れ先の人も生きがいというか、楽しんでやっておられて、お礼の手紙が来る、あるいは何年か経って改めて来ていただくなど、お互いがウィンウィンになると感じます。

また豊かさを感じられるという点においても、農村というと昔の家というか、そういった素晴らしい環境が残っている訳ですが、地域では高齢化が進み、自分の子供たちも都会に行ってしまうと、就職してなかなか帰ってこないといった状況で、今まさに担い手が環境を維持するのが難しい時代になってきていて、本当に大変です。それを農村で生まれ育った人たちが守っていくことが決まりのようになっていたのですが、やはりこれからは地域の人たちだけではなく、もっとよその人が農村に入ってきて、その地域を守ることが必要だと考えています。田園風景を見ていやな景色だと思う人は多分いないはずで、農村というのは心の豊かさを感じられる素晴らしい場所だと思っています。七つの重点政策について、一番から七番までありますが、農業は全ての分野とマッチするのかなと思っています。医療・福祉にしても農福連携という部分がありますし、災害対策にしても農地や田んぼがいざというときの避難場所になったり、子育て・教育との関係もありますし、そういった点で全ての部分が農業、農村、農地といった部分と関わってくると思うのですが、やはり農業が疲弊していて、

担い手が少なく大変だという中で、20年後になりますと、今と同じ農業、農村の方々がどれだけ残っておられるかと心配なのですが、そういった点から考えても、いわゆる農村学のようなものを政策の資源としてうまく利用していただければ、農家ではない方々も、中山間の農村地域で頑張っている農家さんにとっても、ものすごく有意義なものになるのではないかなと考えています。つまりこの農業・農村を計画の色々なところに入れていただいたらいいのではないかなと思っています。

また、豊かさを感じられる共生の京都づくりの中に、未利用地の再エネ導入の推進という項目があり、温室効果ガスの排出量を45%減らすとあります。いわゆる耕作放棄地がたくさん出てきているのですが、私としてはソーラーシェアリングという形で、下で農作物を作りながら、上で電力をつくることを行った方がいいかなと思っています。農業は、様々な資源だという感じで考えていってもらえたら、農家の方もものすごく協力できるようになるのかなと感じた次第です。

- 子育て環境日本一の政策について、例えばいじめとか虐待みたいな孤立対策は、既にお生まれになっているお子さんへの対応で、厳密に言えばこれから子供を産み育ててという事には繋がらないのではという話もあり、最終的な結論は、子育てに関する政策全てを子育て環境日本一を目指すために粘り強く地道にやるのが、子供が増えることにつながるのだと言われています。ただそう言いながらどんどん合計特殊出生率は京都だけではなく全国で下がっています。そろそろ皆さん少子化対策ということで、より子供がたくさん生まれるような施策に舵を切るべきではないかという議論も全国でも起こり始めているということで、今回の改定ではどうしようかと非常に悩みがあります。

また、京都府内の地域性、福知山市では合計特殊出生率が2.07、他の北部の自治体も高いところが多いですが、一番少ないのはなんとと言っても京都市内です。これをどう捉えるかなのですが、北部の人と子育て環境日本一の実現について議論したときも、4年制大学がなくて人が出ていくから、その対策をしてくれとか、産業振興とか、そういった話が多く、我々が書いている子育て環境の日本一の話と少し離れてしまうので、なかなか難しいなという悩みもあります。

もう一つよく議論が行われているのは、子育て世代は皆さん、滋賀県に住居を求めておられるということです。だから、京都市内は、子育て世帯が少ないですが、子育て世代を都道府県間とか市町村間で取り合うのが果たして社会的意味があるのかどうかという議論もあって、南部の方だと、結婚したら京田辺市に住んで、子供ができれば精華町に住んでといった、居住地戦略のようなものがあるようですが、それって移動しているだけなので、少子化対策になっていないという点で議論は非常に難しいと思っています。今悩んでいることをお話しするだけなのですが、その辺りを含めて少子化対策をどこまで、しかも4年間という計画の中でできるのかというところが悩ましいと思っています。

●なかなか簡単に解決できない課題だと考えます。「安心」「温もり」「ゆめ実現」という分野別に議論する進め方ではありますが、やはりそれぞれが全て関係しているし、もちろん地域によって違いもあります。すぐに具体的な提案はできないですが、問題となっている所、手かせ足かせとなっている所を一つ一つ解決していくのが現実的ではないかと考えます。例えば、府北部地域では合計特殊出生率が意外と高かったり、Uターンする方が多かったり、おそらく子育てしやすい等の理由があるはずですが、また、北部地域は医師少数区域かつ高齢化率も高いにもかかわらず、幸福を感じている方が多いと聞きます。どういう指標で幸福度を測るかにもよりますが、例えば、京都市に比べて、高齢者向けの施設が充実していることが要因かもしれません。おそらく様々な流れや経過の中で、今そのような形になっているのだと思いますので、これを意図的にどんどん変えていくことはまだ難しいと思いますが、こうした流れや経過を再びどのように作り出していくかという視点で考えることが重要ではないかと考えます。

●子育てや子どもの出産という視点の前に、子どもを産む世代が京都に住むためにはどうすれば良いか、と思うことがあります。京都で就職をしたい学生が、どこで、どのように京都の中小企業の求人にアクセスしたらいいかわからないと聞きます。これだけ京都に大学があり、他府県からいろんな方が来るのに、京都で就職したい方が結局東京の企業に就職、あるいは全国転勤がある企業に就職するという選択をされるケースもあります。多くの学生がアクセスする大手就職サイトなどに掲載されるのは全国展開しているような企業がすごく多く、京都にある中小企業や地域企業がどのように求人を出しているのかわからなかったそうです。就職を控えた学生に対して京都企業を紹介することができれば、子どもを産む世代が京都に残ることにもつながるのではと感じました。

●3つの大学で就活支援を行っていますが、京都ジョブパークを聞いたことがない方が多いです。高校では就職担当の先生が生徒1人1人が就職するまで面倒を見ていますが、大学生は個人がインターネットで調べて就活をしています。これからは、大学のキャリアセンターにおいても、学生がどういうことを目指して、どんなキャリアを作りたいかを把握し、情報提供をすべきと考えており、大学に対しても京都ジョブパークと連携し、十分活用してほしいという話をしています。しかし、なかなか下級生や仲間同士でつながっていきません。京都ジョブナビは、京都府と京都市でばらばらだったものが一本化されました。そこからアクセスできる京都に本社がある企業に対して、京都枠を作ってほしい、つまり、地域に貢献し、地域に生かされる会社であれば、地元の人を採用する枠を一定程度作ってもらえないかとお願いしましたが、良い返事はいただけませんでした。地元を人の採用が増えれば、そこからどんどん広がっていくのではないかと思います。

●御指摘のとおり、京都は大学生が多いのに、京都への定着率が非常に低いです。中小企業が個別に採用しようと思っても全ての大学にアプローチするのは大変ですし、大学にも企業情報が集まらないため、京都ジョブパークがマッチングを行っており、合同企業説明会等が徐々に定着してきています。今の人手不足の状況は、ある意味でチャンスであり、全国の様々な企業が京都の大学生の多さに着目し、京都に拠点を置けば人材を確保できるのではないかと思いつている企業も出てきています。これが京都だけの特殊システムだとまづいと思いますが、大学生の時の居住地で就職すれば、若干結婚年齢も下がるかもしれません。また、子育て環境日本一を見える化するために、粗い試算ではありますが、様々な指標をデータチャートにして公表し始めています。雇用の視点は非常に重要です。魅力的な企業がたくさんあるので、企業側と学生側の両方の選択肢を増やし、さらなるマッチングに努めたいと思います。

●少子化対策は非常に大事ですが、速攻性があるわけでもないし、少子化のトレンドを大きく変えることもなかなか難しいと思います。だからこそ、少子化対策を行いつつ、少子高齢化を前提とした労働環境へと舵を切る政策をしっかりと考えていくことは当然と考えており、生涯現役の施策が非常に大事だと思っております。キャリアを切らさずにいつまでも仕事をしていける社会こそ、ある意味温もりのある豊かな社会だと思いますので、生涯現役は、「子育て環境日本一・京都の実現」と「豊かさを感じられる共生の京都づくり」において、非常に重要な施策だと思います。議論のたたき台として、後者の分野に記載された施策は、ほとんど生涯現役の施策とオーバーラップしているところがあると考えるので、生涯現役という言葉をもう少しこの計画の正面に持ってくるのが、目指すべき京都の姿に繋がるのではないかと思います。

また、豊かな社会とは、住んでいる人が自己実現をし、満足感を感じられるものだと思います。価値観の多様化に伴い、昔なら仕事での自己実現だけで大体満足していたのに、最近はそうではなくなってきました。そういった意味で、例えば芸術や文化、スポーツ、地球温暖化対策への参画、農業など、多様な自己実現の場がないと、豊かな社会はできていかないだろうと思います。そういうものは個々の企業が提供できる場が限られているので、行政から提供してもらうことで、仕事をしながら、別の意味での自己実現を自ら掴んでいくことができる、価値観が多様化した中で自己実現の実感を持てるような社会を作っていくしかないと思います。パブリックセクターにおいては、今までは公共投資を考えれば良かったのですが、これからは、府民なり市民なり国民が自己満足できるようなチャンスや場を提供していくことが新たな公共政策であり、豊かさを感じられる共生社会を作っていくことになるのではないかと思います。

●御指摘いただいたことは全て勉強になっております。これをもっと具体化したいと思っておりますが、オール京都体制でもう一度レベルアップしなければいけないと感じました。産業

ではオール京都体制ができていますが、子育てや高齢者の社会参加はまだ着手したばかりです。生涯現役クリエイティブセンターも含めて、オール京都体制が重要で、これらを本当に中身のあるものにしないといけないなと思いました。ICT の関係では、24 時間悩み相談を受けている東京のベンチャー企業の話として、日本人はきわめて真面目なので、夜の 11 時頃になると、子供が熱出したときにどうしたらいいかを隣の人になかなか聞けませんが、そうした企業の取組を知っているだけで、そこに電話すると、専門の人に対応いただけ、ものすごく安心されるそうです。救急車を案内する必要がある案件は、200~300 件に 1 件ぐらいだそうです。そういうサービスが世の中にあることがなかなか知られていない。本日御指摘いただいたことの中にも、行政として既に取り組んでいるものも多くありますが、世の中に知られていません。かつてのようにホームページなどで個別に検索するのではなく、非常にダイレクトに繋がっていく社会が来ています。スマートシティフォーラムでも提案していただきますが、こうしたツールをどう使っていくのかということについても考える必要があります。それから、テーマ別会合の安心分野でもお話がありましたが、あらゆる施策が横串でつながっていますので、府庁内の横連携が課題です。最後に、教育について、課題解決型の教育の事例として、ミネルバ大学と記載しております。超難関で、授業は基本的にオンライン、おそらく世界ランキング 1 位の大学だと思います。こういう新しい仕組みを日本で実現できるかわかりませんが、例えば、農業と教育をどう組み合わせるか。この分野で、もっと色々な成果が生み出せるようになると良いと考えています。本日いただいた課題について横串を刺して連携させる仕組みをどう作るのか、オール京都体制のつなぎ役が行政であるならば、行政内のつなぎももっと円滑にしていけることが大きな課題と思いました。